ひとえに

小野晃太朗

ひとえに

登場人物

思恵　しえ
とまり　とまり
依子　よりこ
林　りん
都　みやこ
施工　せこう　工務店の殺し屋
アンダー　代役専門
四月一日　わたぬき
肖像　しょうぞう
他　記者、警官

思恵

思恵、座っている。

子供のころ、大人になるという言葉は、大きな体になるという意味だった。空は遠く、地面が近い。ほんの少し高いところに登るだけで、簡単に景色は変わってしまった。色んな人の手が私に触れる。
祖父はわたしの体を頭の上まで軽々と持ち上げると、景色を見せるようにぐるりと回った。父は、階段の上からバランスを崩したわたしの体を両手で抱きとめた。心無い言葉に涙を流したり、はじめて人は死ぬことを知った夜、想像力の生み出す恐怖に震える私の体を、母は全身で受け止めた。
私は少しだけ大きくなる。自我をもち、嘘をつき、物と生き物を傷つけることを覚えた頃、いままで私を守っていた大きな手が、体を押さえつけ、しばるようになった。筋や理屈の通ることもあれば、通らないことも増えた。理不尽さが私の心を引き裂いた時、はじめて大人になりたいと思った。
大人とは力のことだ。理のないものに打ち克つには力が必要だった。
多くの会話と対立を経て、経験と学びを深めたあと、私はまた、少しだけ大きくなる。
いつの間にか、感情の変化を支配下に置くことを、大人になると呼ぶようになっていた。
感情に振り回される人間は愚かに見えたし、大人になりなよと、人に対して口にするようになった。
「あなたはどうなの？」「私はまだまだですよ。」そんなやりとりを繰り返しながら、全てが許せなくなって息が詰まり、観念するように何かを許す。その内また、全てが許せなくなって、窒息しかけて許す。そういうこと繰り返しているうちに、心が動かなくなっていた。
いま、わたしにかけられるその言葉は、何かを封じこめようとする。そして、私はそれを軽薄に受け流す。
物分りの良さは、ひとつの道具だ。道具というには使い所がある。

生まれてからの十年は、多くのことをこなす人間として暮らした。芸術と空想と物語を愛していたし、未来のことばかり考えていた。なかなか進まない時間に足踏みをしていた。
その後の十年は、何もできない人間として暮らした。人間は汚れのついた多面体だと思っていたし、息をするのもされるのも嫌だった。日の出の前に時よ止まれと、いつも心の底から願っていた。

2つの暮らしを行き来しはじめたことで、移動する、往復する、間に立つことに興味が湧いてくる。
私は歩きながら考えることにした。

ひそひそとした声が聞こえる。都と林の会話。

都　そんなつもりはなかったって言ってもね、そうなってるの。人間って、言われるまで自分がどういう表情しているかわからないものだと思うけど、そういう部分があるのは分かる。でもね、不機嫌な態度が外に出てしまうと、仕事に支障が出る。相談しづらくなる。話しかけづらくなる。細かい確認ができない、ミスが出る。（間）人間は環境が悪くなると、改善に務める。するとね、あなたの機嫌を取ろうとしてしまう。人の機嫌をとるなんて、健全ではないよ。もう舌打ちするのはやめて。攻撃的な言葉で悪態をつくのもやめてほしい。あなたの働きには助けられているし。負担をかけていることも申し訳ないと思ってる。でも、このままだと他の人が育たない。
林　改善します。
都　お願いします。
林　申し訳ありませんでした。

林、お辞儀して去る。

面接。

思恵　「生物学的」な話はわかるんですよ。でも、「生物学的に」って話がはじまると、違和感を感じることが多くて。なんていうんでしょう。人間が築き上げてきた精神的な文化とか、文明とか、法とか、そういうものが突然無視されたような感じがして。「なんとか学」とか、学問として話すっていうのは、仕組みの話じゃないですか。
都　（頷く）
思恵　でも、別に全然学問の話じゃない。
都　（頷く）

思恵　ひょっとしてこれ、なにか飲み込まされるための前提なのかなって疑問が湧くんですけど、否定しづらい。事実が混じっているから。ですかね。（間）でも、問題だと思っているのはそういう「生物学的な」男女二元論の話をしたい人だかりの後ろの方に何かがいること。それは、目を合わせようとすると隠れる。（間）姿がないと、指をさすことも、認識することも、考えることもできない。

都　なるほど。

思恵　まず、正体が知りたいですね。

都　そうですね。

思恵　それが、どこからきているのか。

都　（頷く）

思恵　炙り出されていくのは、迂闊なもの、詰めが甘いもの、衝動的で、我慢のできないものたち。でも、まだその奥に冷血で、狡猾で、容赦ないものがいるような気がする。気の所為ですかね。

都　そんなことはないです。

思恵　（息を漏らす）

都　いますよ。そういう存在はいます。でも、なかなか尻尾を出さない。

思恵　（都を見る）わたしはそういうものに、光をあてたい。

沈黙。

都　近い思いを抱いています。思恵さん。あなたにひとつ聞いてみたいのだけど。

思恵　はい。

都　もし、それがいざ、目の前に現れたとして、話が通じなかったらどうしますか。

思恵　話が通じない。

都　聞く耳を持たない。ずれた答えが返ってきて、あなたのことを責め立てるような質問が返ってくる。見え透いた言葉たち、はっきりした短い攻撃的な言葉。

思恵　（沈黙）

都　ごめんなさい。
思恵　いえ。でも、そうなるかもしれない。
都　（頷く）
思恵　（考えている）言葉。
都　そう、わたしたちは最近ずっとそのことについて考えています。
思恵　私も、考えています。
都　（間）お話しましょう。いつでも遊びに来てください。
思恵　ありがとうございます。
都　あなたの話が聞けてよかった。
思恵　聞いてくれてありがとうございます。
都　話してくれてありがとう。

都、去る。子供の声が聞こえてくる。

とまりの部屋。

とまり　ずっと想像力が爆発している感じがある。イメージが別世界に羽ばたく感じではなく、心霊ホラーを見た後に、トイレに行くのが怖くなる感じに近い。想像する結果の中に恐ろしいものが入り込んでくる。これは、なんとなく、生命の危機に瀕した人間が生き延びるための機能だと思ってる。その誤作動。逆まつげは目に刺さり、伸びすぎた爪は割れる。雨は降り止まない。植木鉢から水が溢れる。一歩も動けなくなる。困った。
世の中の人間が誰も家の外に出なくなったあと、失われたものについて多くの言葉が交わされた。体でわかっていること、ピンとこないこと。いろんな話を聞いた。発見や気づきもあった。
必要のないものの話を聞くたび、飢饉のときの間引きの話を思い出す。人間の、間引き。

生物にとって、全ての運動の完全な停止は死を意味する。でも、止まるということは、気づかれないように動くことだ。死んだふりをした私のおなかに耳を当ててほしい。水の音がするから。静かな日々に罪悪感を感じたら、ようこそと出迎えたい。ここは、朝焼けで時間が止まった世界。すべてが終わってしまう直前は、ここがいい。

（間）ほんとうのところ、みんなのほうから、私のところへきたと、そう思っていて、とても嬉しかった。

とまり、思恵。

人に好意を向けている人間が、向けられている当人からするとその魅力を失っていく現象。あれは何なんだろう。

思恵　張り切りガソリン漏れ現象。

とまり　どっちかというとタイヤの空すべりに近い。

思恵　空すべりか。

とまり　うん。

思恵　カメラ目線で写真が台無しになるのとか。

とまり　あれは写真の種類が変わるだけだから。

思恵　なるほど。

とまり　うーん。

思恵　私にはわかんない感覚だな。

とまり　なに？

思恵　一連の流れが。

とまり　そう？

思恵　うん。

とまり　わたしがおかしいのかな。

思恵　なんで？

とまり　麻酔が効かない体質みたいな。

思恵　それは、おかしいことじゃないでしょう。

思恵　そう？
とまり　うん。
思恵　わからないことばかりだな。
とまり　それはそう。
思恵　（ため息）
とまり　どんな人だったの？
思恵　いい人だったよ。
とまり　ほんとに？
思恵　そう見えた。
とまり　うん。
思恵　だから怖いこともあった。
とまり　そう。
思恵　うん。

とまりは思恵の隣へ行く。

思恵　面白い話をたくさんしてくれたし、面白いところに連れて行ってくれた。影響を受けるくらい素晴らしい映画や小説をシェアしてくれたし、とても楽しかった。でも、生活を共にする想像はできなかったし、心がどんどん動かなくなっていった。このままでは良くないと思って、自分の今の状態の話をした。誠実に聞いてくれたよ。でも、すっと肩に手を回されていて、指先が鎖骨に触れ始めて、あ、これはやばいなと思って、手を振り払って逃げた。どう思う？
とまり　え。
思恵　お互い、別れることは了承した。その後。
とまり　うん。
思恵　とっさにそうしてしまったんだけど、正しかったのか分からない。
とまり　なにが？

思恵　なにか、私は良くない勘違いをしていないだろうかって。
とまり　間違いとか、ないでしょ。
思恵　そう？
とまり　そうだよ。むこうはずっと無言だったんでしょ？
思恵　うん。
とまり　それは良くないことだよ。
思恵　そう？
とまり　うん。
思恵　なんでそうしたのか、まったくわからない。
とまり　わたしにもわからない。けど。
思恵　うん。
とまり　（言葉を選ぼうとする）仲直り、みたいなことをしようとしたのかもしれない。
思恵　え。
とまり　わかんないけど。
思恵　怖すぎるだろ。
とまり　うん。
思恵　意味がわからない。
とまり　うん。
思恵　ちょっと、やばい。
とまり　うん。
思恵　聞いてくれてありがとう。
とまり　ううん。話してくれてありがとう。
思恵　ちょっと、きつめにハグしてもらってもいいですか。
とまり　了解。（きつめのハグ）
思恵　ありがとうございます。

とまり　（手をはなす）いえいえ。
思恵　気付けになりました。
とまり　（笑ってる）

思恵、とまり、林、都が話している。

都　お茶でもどうぞ。インスタントだけど。（ポットからお茶を注いで渡す）
思恵　ありがとうございます。
林　ここは応接室。という名の会議室。あっちも会議室。その先にも会議室があって、その隣が多目的室。奥には小さいけどキッチンがあって、その隣はいま編集室って言ってるかな。
都　集まって勉強会をしたり、新聞を作って配ったり、ほかはずっと話し合いかな。
林　大体仮眠室になってる。
思恵　勉強会はどういうものですか？
都　基本的に会員たちの自主開催。作家を取り上げて短期集中でやる人もいれば、テーマを掲げて長期でコンスタントにやってる人もいるかな。
思恵　たとえば。
都　近代まで遡って、作品の中に映り込んだケアの実態と作家の精神性を掘り下げたり、現代の作家の問題意識と今のことをつなげて整理しようと動いたりもしてる。
思恵　なるほど、健全ですね。
都　健全か。健全ってなんだろうね。
思恵　わかんないです。
都　わかんないか。いいことだね。
林　なにか、やりたいこととか、ありますか？
とまり　みなさんとお話ししてみたいです。

都　どうして？

とまり　え。

都　（とまりを見る）

とまり　わからないです。

都　ふーん。わからないんだ。

とまり　はい。

都　存在していて、名前のないものですか？

とまり　どうだろう。ある気がする。

都　話したい？　聞きたい？

とまり　どちらも。

都　どうして？

とまり　まず、自分の中にあるものに、名前がほしいから。

都　そう。

林　わたしたちもよく話し合いをします。わたしたちの中で、意見を戦わせて言葉を鍛えること。それから、わたしたちと考えの違う人たちに会いに行って、議論すること。この２つが主ですね。

思恵　話し合い。

都　検討会って言ってる。

とまり　検討？

都　議論を繰り返して、深めていく。別になにか答えが出るわけじゃない。

とまり　そうですか。

林　楽観的かな。

思恵　まだ、概要しか聞いていないので、わかりません。

林　そう。

とまり　でも、聞いてみたいことはたくさんあります。

都　そう。

思恵　はい。
都　そのうち、あなたたちの話も聞かせてね。
とまり　はい。
都　ふたりとも。また遊びに来てね。
思恵　ええ。もちろんです。
とまり　（静かに頷く）

思恵ととまりは静かに歩きはじめる。

とまり　ねえ。
思恵　待って、まだ早い。
とまり　わかった。
思恵　もう少し歩こう。
とまり　どうしたの。
思恵　まとまらない。
とまり　怖いの？
思恵　それもある。

しばらく無言で歩く。
歩く速度はゆっくりになっていく。

思恵　聞いてくれそうな気がする。
とまり　（黙っている）

思恵　わたしの話。
とまり　うん。
思恵　未熟なはずなんだよ。まだ私は。ところどころ論理が飛躍したり、破綻したり、感情的になったり、そういうことも、全部、まるで普通の話みたいに反応がかえってくる。
とまり　（笑う）
思恵　なに笑ってんの。
とまり　しーちゃんとおんなじくらい、いかれてるんでしょ。
思恵　え？
とまり　似てる人なのかも。
思恵　そうなの？
とまり　わかんないけど。
思恵　大人扱いされたのか、子供扱いされたのか、わからない。
とまり　でも、まあ、今までよりは
思恵　はいはい、ましですよ。でも。
とまり　うん。
思恵　油断しちゃいけない気がする。
とまり　それはそう。
思恵　うん。
とまり　運動は、人間を巻き込む力があるから。
思恵　そうね。
とまり　なにかが報われそうな予感って、怖いね。
思恵　（わからない）
とまり　恨みとか、憎しみかもしれないのに。
思恵　とまり。
とまり　なに。

思恵　作家になったほうがいいと思う。
とまり　しーちゃん、そういうこと人に言うの、よくないと思うよ。
思恵　そうかな？
とまり　うん。
思恵　反省します。
とまり　しなくていいよ。
思恵　え。
とまり　うれしい。
思恵　うん。
とまり　わかんないけど。
思恵　うん。

とまりは去る。

思恵が入ってきて座る。
医師。

医師　最近はどうですか。
思恵　自分の周りは騒がしいんですけど、私の中はすごく静かです。
医師　（聞いている）
思恵　言い方が良くなかったかもしれない。
医師　（飲み物を飲んでいる）
思恵　私だけ水の中にいるみたいです。すぐに疲れてしまう。なんだろう、情報量が多いのかな。眠くなっていく。
医師　（聞いている）
思恵　でも、家に帰ってきて、本を読んだり調べ物をしていると、目が冴えてくる。眠れなくなる。

医師　（聞いている）
思恵　自分の時間がほしいのかもしれない。いつも何かに追われている気がする。
医師　焦りはありますか。
思恵　程よく、って感じですね。
医師　（小さく鼻で笑う）
思恵　自分にとってのなにか生活リズムを探すのにちょうどいいかもしれないなと思っています。
医師　そうですか。
思恵　はい。
医師　なにか、気がかりなことはありますか。
思恵　（腕を組む）いっぱいあります。
医師　いっぱいあるんですね。
思恵　はい。大事なことと、重要ではないけど今すぐ取り組みたいことがいくつかあって、何から手を付けようか考えているうちに、別なことをやっている感じです。
医師　私にもありますよ。
思恵　そうですか。

施工が座っている。そこにアンダーが入っている。

アンダー　おつかれさまです。
施工　おつかれさまです。
アンダー　この人ですね。
施工　そうです。で、申し訳ないんですけど。
アンダー　なんですか。
施工　少し、手元が狂ってしまいまして。
アンダー　なるほど、（近づいて確認する）

施工　いけますか？
アンダー　（考える）
施工　（沈黙）
アンダー　なんか、もう、顔とかわからないですよね。
施工　一応、写真は撮っておきました。
アンダー　助かります。
施工　なにもしていないときの。（SD カードを渡す）
アンダー　何したんですか？（受け取る）
施工　聞きます？
アンダー　（間）やめておきます。
施工　そうですか。
アンダー　（答えない）
施工　名前、短くしたんですね。
アンダー　そうです。
施工　なにか、変わったんですか。
アンダー　心持ちですかね。
施工　そうですか。
アンダー　なんですか。
施工　なんでもありません。
アンダー　そうですか。
施工　では、これから清掃に入るので。
アンダー　わかりました。
施工　おつかれさまです。
アンダー　おつかれさまです。
施工　あとはよろしくおねがいします。

アンダー　おねがいします。

アンダーは去る。

施工は掃除を始める。掃除が一段落すると、荷物をまとめ、座る。

林が入ってきて、その近くに腰掛ける。

施工は清掃員のように見える。

林　自分自身に終わりが近づいてくる気配を感じると、なにか、静かな感謝の気持で身を捧げようとしてしまう。閉店セールのようだし、終了間際のフリーマーケットみたいな感じもする。でも、これは賭けではなく、祈りなのかもしれない。他者の想いを想像して、そこに寄り添いながら、なんだか自分が道具のように思えてきて、自分らしさというものが、急にわからなくなる。

施工　分かりますよ。

林　（間）そうですか。

施工　なんとなく。

林　はい。

施工　私も、道具としての利便性を目指したことがありました。でも、そうなってくると、心の動きが邪魔に感じる。やっぱり、それは不自然だ。そう思って、今は、論理性と感情のバランスをとって、人間としての不完全さを目指したほうがいいのかもしれないと思っています。

林　わかります。

施工　そうですか。

林　わかってくれる人に初めて会いました。

施工　そうなんですね。

林　はい。

施工　ごめんなさい、急に話しかけてしまって。

林　いえ、びっくりしましたけど、

施工　そうですよね。

林　いえ。

施工　では、私はこれで。

林　お仕事頑張ってください。

施工　ありがとうございます。

会釈の応酬。袋を持ち、施工は去る。

都の語り。

都　仲間についての話をします。

なにか言いたいことがあるとき、話を聞いてもらう手段のなかのひとつに、その集団の仲間になるという方法をとっていたことがあります。なんだろう、なにかを伝えたい。待ってもらいたい。そういうことを考えた時に、優先順位の頂点として君臨していた時期があった。私の中には暴力で屈服させられた歴史と、暴力により屈服させてきた歴史の両方があります。力は四肢の自由を奪い、口をふさぐものもあれば、言葉の力のみで心を折るものがありました。見えるもの、見えないものがどちらもあって、手を握る力の震えとしてあらわれるときもありました。そうそう、形がない。形がないと出口がない。いや、出口なんてないんですけど。なんだろうな。うーん。したくはないけど、してしまったこともたくさんある。自分の身を守るため、自分にとって大事な人間を守るために、相手を破壊する方法がこの世にある。そのことについて、考えていた時期もあります。

この世は濃淡です。物事と物事の間には無限の違いが広がっている。白と黒の間には無数のグレーがある。話すと黙るの間には話せないと黙っていられないがある。動くと止まるの間には、少しだけ動く、というものがあります。少しずつ動きながら、私は考えていきたいと思っています。

都は座る。

林　良いと思います。良い。自分の記憶が掘り起こされていく感覚がありました。でも、だからこそ難しいと思います。

都　胸の内の痛いところに触れられると、ときに人は攻撃的になる。
そうですね。そのとおりだと思いますが、難しいですね。一体どうすれば、生き急ぐ人は立ち止まり、振り返ってくれるのだろう。
林　自分の外側にあるものによって、目的が中断することを経験する。
都　そうですね、正しい。だから難しい。
林　はい。

都は去る。とまりが林の隣に座る。

とまり　言葉が届かない相手に、言葉を届けるにはどうしたら良いでしょう。
林　言葉が届かない相手。
とまり　聞き入れないことを最初から心に決めている人、聞くふり、こちらの考えが最初から間違っている前提のような。
林　わかるよ。
とまり　対等に見られていない。
林　そうだね。
とまり　ただ、ひたすら、対話を試みるしかないのでしょうか？
林　わからない。
とまり　わからない。
林　（考える）
とまり　いつまでなめられ続けたら良いのだろう。
林　（考えている）
とまり　私は、世の中を変えたいと思っています。今すぐにでも。
林　私もそう思っている。
とまり　でも、一体いつまで過去から学び続ければ良いのでしょうか。
林　（考え、話し出そうとするも）

とまり　（制するように）気休めはいいです。
林　わからない。正直な所。
とまり　そうです、分からない。分からない内に、自分のことも分からなくなってくる。それが嫌です。
林　（黙っている）
とまり　わたしは怒っています。でも、怒っていることを忘れかけている気がする。忘れるというのは沈むことだから、引き上げてやればいい、でもどうすれば。学ぶことも大事だ。問題の核心を見失わないように、でも、そうしている中で、ひどいことは起きてる。それを止めることはできるのか。わからない。駄目でしょう。
林　返す言葉がない。
とまり　手伝ってください。私は勉強がしたいし、差別によって人が死ぬのはもう嫌です。
林　手伝えることと、手伝えないことがあります。
とまり　分かっています。
林　ひとつ聞いてもいい？
とまり　なんですか。
林　あなたの切実さはどこから来ているの？
とまり　（考える）答えなきゃだめですか。
林　いえ、そんなことは。
とまり　答えたくないですね。
林　申し訳ない。
とまり　いつか、話せるといいなとは思っています。
林　私もそれを願ってる。
とまり　（間）ごめんなさい、ちょっと攻撃的でした。
林　いえ、率直な意見をありがとう。
とまり　聞いてくれてありがとうございます。
林　もっと、色んな人が耳を傾けるべきなんだよ。
とまり　そうですね。

肖像は、眠っている。

チャイムの音。何度か。

肖像　どうぞ。

都、入ってくる。

都　お邪魔します。
肖像　お久しぶりです。
都　お久しぶりです。
肖像　いつもお会いするのが外だから、
都　屋根のある所で会うのは、不思議な感じがしますね。
肖像　（鼻で笑う）そうですね。
都　これ、つまらないものですが。（袋を渡す）
肖像　ありがとうございます。（受け取る）これは？
都　パンプキンパイです。
肖像　へえ。
都　自然農法で作られたかぼちゃです。
肖像　へえ、畑とか、やられているんですか。
都　（首を横にふる）スーパーで買ってきたんです。畑は前に試してみたんですが、手が回らなくて。
肖像　そうでしたか。
都　お恥ずかしながら。

肖像　いえ、恥ずかしくなんてないですよ。
都　ありがとうございます。

お茶の支度がされる。

肖像　どうぞ。
都　お構いなく。
肖像　それで、今日は。
都　改正法案が出ましたね。
肖像　出ました。それで。
都　連帯できませんか。私達とメトロで。
肖像　（考える）
都　今は私個人の意向として話しています。
肖像　そうですか。（考え込む）
都　可能性はありそうですか。
肖像　どうでしょうね。
都　難しいでしょうか。
肖像　難しいと思います。
都　例えば、どういうことが。
肖像　「中絶の規制が出た途端に手を組もうということですか」「自分で命を選んでもいいと思っているのか」と、そういう声が出てきそうですね。どうですか？
都　（考える）産む自由はこちらにある。としか言えないですね。
肖像　正しい。正しいですよ。僕もそう思います。でも、我々は、すべてを天に任せる願いを受けて、生まれてきているんですよ。僕を含めて。「私達を殺すのか」
都　（頭をかかえる）

肖像　願いが呪いになる。
都　（黙っている）
肖像　呪いは認知を歪める。あなたたちもご存知ですよね。
都　はい。
肖像　いま、他のみんなは家に引きこもっています。集会所にも出てこれなくなりました。デモにいたっては現地集合、現地解散です。まあ、普通か。
都　（沈黙）
肖像　僕たちはいま、なにか大きな一つの目的のために手を取り、他のことに目を瞑るって、そういう器用な真似はできないと思っています。力がない。
都　力。
肖像　弱っていて過敏になっている。
都　そうですか。
肖像　はい。
都　危険が近づいていても。
肖像　そうです。（間）もう、いじめられ過ぎた。なにかが触れる。ただそれだけで壊れてしまう。終わってしまうようなところまできています。我々はここにいる。ただそれだけがのこっている。
都　はい。
肖像　まず、感情のことをなんとかしないと、論理を受け止めるのは難しいでしょう。
都　（沈黙）
肖像　とりあえず、一旦持ち帰って自分なりになんとかできないか考えてみます。
都　ありがとうございます。
肖像　いい方向に向かうのなら、そうしたいと思っています。
都　これを機に、連絡をとりあえれば。
肖像　そうですね。でも、正直、今なのか、という気持ちです。
都　申し訳ないです。

肖像　（目を閉じて首を横に振る）

肖像と都は握手をする。

都　お邪魔しました。
肖像　また、お話しましょう。
都　（お辞儀をして、去る）

チャイム。

記者　すいません。

記者が立っている。

肖像　ええと、あなたは。
記者　わたしは、二子山テレビの者でして。肖像さんでいらっしゃいますか。
肖像　そうです。
記者　いくつかお話を伺いたいことがありまして、いまお時間少々よろしかったでしょうか。
肖像　申し訳ありませんが、一応うちの方針として、アポ無しの取材はお断りしています。
記者　そうですか。
肖像　はい。それに、ちょうど、これから出るところで。
記者　そうでしたか。申し訳ありません、出直します。
肖像　では、また。
記者　ありがとうございます。失礼します。

記者、去りかけるが、戻ってきて、名刺を渡す。

肖像　ああ、そうでした。
記者　すいません。
肖像　いえ。
記者　では、また。

出掛ける肖像を見送り、記者は行く。
とまりを見かけて呼び止める。

記者　あの、すいません、学生さんですか。
とまり　はい。
記者　私、二子山新聞の者です。（名刺を出して見せる）
とまり　はい。
記者　改正法案が出たのはご存知ですか。
とまり　はい。知ってます。
記者　では、
とまり　あの人権意識が微塵も感じられない法案のことですよね。
記者　はい。
とまり　あなたはどう思いますか。
記者　私、ですか。
とまり　そうです、あなた個人として。
記者　え。
とまり　いや、えとかじゃなくて。私は最低だなと思います。人権意識がない。出生率をコントロールしようとしている。産むか産まないかは女が決めるべきだと思います。あなたはどう感じていますか。

記者　その、酷いと思います。
とまり　そうですよね。
記者　はい。
とまり　なんで私に話しかけたんですか、一人で歩いていたからですか、私が女に見えるからですか。
記者　いえ、そういうことではなく。
とまり　じゃあ、どういうことなんですか。
記者　取材へのご協力ありがとうございました。
とまり　あ、名刺ください。さっきの名刺ください。

もみ合いになる。

記者　すいません、触らないでください。触らないでください。
とまり　ごめんなさい。

記者は逃げ去る。

とまりは座る。
人々が現れ、座る。
勉強会。

林　『フェイブルマンズ』は見ました？
都　見ました。
とまり　見ました。
林　どうでした？
とまり　良かった。

みんな頷き、とまりを見る。

とまり　家族の物語だと言われたりしているけど、私には、コミュニティの中の個人の物語だと思いました。作品の感想として、家族愛って言葉が使われるのが嫌いなだけかもしれないんですけど。

みんな首を横に振る。とまりはみんなの表情を見て、少し笑う。

とまり　『シンドラーのリスト』では殺されるユダヤ人、『ミュンヘン』では殺すユダヤ人が描かれている。すごいバランス感覚。『シンドラーのリスト』の終盤で、プレゼントされた指輪を落としてしまって、傍に居た人がシンドラーと一緒にしゃがんだところでびっくりしました。常軌を逸したリアリズム、あるかもしれない偽物。でも、筋が通っている。だから狂っている。恐ろしい。『ミュンヘン』の暗殺チームも、仕事の合間にリーダーの手料理をみんなで囲みながら会話をする。チームのメンバーが殺されて、料理を作りすぎる。繊細で、わかりやすい。優れたバランス感覚をもった作家だと思いました。（親指で両目をこする）

人々、頷く。

とまり　（鼻をすすりはじめる）国家、集団、そこに所属する人々を描いた後、その中の個人の歴史に向かっていく。興味深く、真っ当だと思います。

都　（ハンカチを手に持っている）

とまり　大丈夫です。なんというか、思っていることを伝えると、なぜか、わからないんですけど。

みんな頷く。間。

林　似たようなことを、私も経験したことはある。

とまり　そうですか。

林　大根とか、引き抜いたときに、根っこから土がこぼれるイメージ。掘り起こすとなにかがちらばる。

とまり　（ちょっと笑う）そうなんですか。

都　食い込んでいたものが、引き抜かれる感じに似てる。

とまり　（無言）

林　ほんとうのことを話すと。

とまり　（頷く）

都　そういえば、宮本研の戯曲も、民衆から、個人へ向かって行ってる気がする。

林　からゆきさんとか種田山頭火とか、

都　歴史というものが人々にどうかかわり、逆にまた、人々は歴史にどうかかわりかえせるのだろう。真っ当な問いだな。でも、民衆という言葉もまた、歴史から見た言葉になる。

とまり　（頷く）

林　民衆から個人へ。では、集まるためには？

とまり　大きな物語は死んでもよかったんですよ。

林　そうだと思う。

都　ひとつの生き物としての群衆をどう考えるか。

とまり　群衆は一個の生命じゃないですよ。

都　でも、性質ってものはあるんじゃないですか？

とまり　性質。

林　意思の介在できない習性ってものがあると思う。

とまり　それを超えていくのが意思ってものではないでしょうか。

都　超える？

とまり　いつ、いかなる時も優先する。約束のように課される。

間。

都　意識は移ろい、中断が訪れる。それが個人の限界ではないかと思うことがあります。
とまり　分かります。でも、個人にも力はある。
林　これは人の意思の話なのか、場の話なのか。
とまり　どちらの話もしています。でも、わからなくなってきた。

一同、沈黙。

林　意思は、か弱い。
とまり　そうでしょうか。
林　どちらもあると思います。
とまり　（沈黙）
都　この世にあるものに対して、新しく生まれたものはささやかですね。
とまり　だから、大声で叫び声をあげる。
林　（黙り込む）
都　声。

間。

とまり　耳をかたむけようなんて、生易しい。
林　（頷く）
とまり　考えなきゃいけないんですよ。
都　（静かに頷く）
とまり　わかってもらおうなんて、そんな、（間、立ち上がって去る）

間。ほかの人々、立てない。

都　ちょっと散歩してきます。
林　都さん。
都　後で電話します。
林　（黙る）
都　薄情ですかね。
林　わからないですけど。
都　私は私で頭を冷やしたいんですよ。
林　そうですか。
都　はい。そういうわけで、その辺を歩いてきます。連絡します。
林　わかりました。

都は出る。
座っている記者と、立っている四月一日。

四月一日　僕はね、本当のところを言うと、君たちメディアのことがとても嫌いだ。人間に与えるショックが大きければ大きいほど良いと思っていて、良し悪しとか倫理とか、長期的な目的がなくて、生き延びることが当面の目的になっている。そういう狡猾さは嫌いじゃないんだけど、なんだろう。死んでほしい。生きたまま、意思を失って、僕たちの道具になってよ。媒体は媒体らしく、手段に終止してほしい。使命感とか、そういうのは良いんだ。
記者　（黙っている）
四月一日　君たちだって人殺しだろう。
記者　（黙っている）
四月一日　何か言えよ。
記者　（何かを言おうとする）自分は、

四月一日　お前たちだよ。わからない？

記者　（考える）それは、

四月一日　嘘をついてはいけない。そういうところまでそっくりだよ、我々は。でも、自分が人間じゃないからって、僕たちのことも人間扱いしないのは、頭に来るな。おたくの社長だって、自分たちが取り上げた人がいなくなったら、「そういうものだったと思う」って言ってるでしょう。

記者　はい。

四月一日　そういうものって、どういうもの。

記者　（答えられない）

四月一日　なにか言ってよ。なにか。

記者　（答えられない）

四月一日　ねえ。（少し考え）まあいいや、僕も忙しい。今日は勘弁してあげよう。

四月一日、名刺を出す。
記者も名刺を出す。交換する。

四月一日　引き続き、よろしくお願いいたします。

記者　よろしくお願いいたします。（深くお辞儀する）

四月一日、記者の手を両手で包む、記者は去る。

四月一日　みなさん。本日はお集まりいただきありがとうございます。また、本日までこの改正法案について、説明不足なことから、多くの誤解や混乱を招いてしまい、大変申し訳なく思っております。我々もまた、ひとえに、国民の皆様の生活をより良いものにしていくため、顔をつきあわせ、日々頭をひねっております。皆さんにもぜひ、力を貸していただきたいと考えております。また、今回の改正法案について、あるがままに生まれてきた方々への支援を打ち切るのかという声をいただいております。これは、現在の住宅支援の対象者となる方々著しく減少しているという事を

受けてですね、現行の生活保護。雇用支援の制度の中に組み込んでいこうという、組み換えですので、打ち切りといった指摘には当たらないと思います。

声　対象者はまだ、大勢いる。

四月一日　周知を徹底してまいります。

声　いまの受給者・利用者と、どう差別化をはかるつもりですか。

四月一日　それも含め、党内で協議中です。また、人工妊娠中絶に関する審査要件については、その緩和を検討しております。人口減少、労働力の低下、経済的格差の是正、みな一丸となって取り組んでまいりたい所存です。国民の皆様のご理解とご協力を願いたい。以上です。

声が大きくなる。

四月一日、両手を打つ。声は静まる。四月一日、座る。

先輩が入ってくる。四月一日の隣に座る。

先輩　四月一日くん。

四月一日　先輩、お久しぶりです。

先輩　きみ、メディア大嫌いだろ。

四月一日　好きな人がいるんですか？

先輩　（ため息）

四月一日　（沈黙）

先輩　いじめすぎるな。

四月一日　何を言ってるんですか。

先輩　感情はつつけば膨らむ。

四月一日　知ってます。

先輩　差別問題はデリケートだ。

四月一日　知ってますよ。

先輩　なめてはいけない。
四月一日　知ってます。
先輩　なぜか分かるか。
四月一日　この世から消えることはないから。
先輩　そうだ。
四月一日　同じ人間は一人としていない。統治のための架空の概念でしょう。共同体は。
先輩　そう。だからこそ、力をかけられて破損した歴史を蔑ろにするな。違うから等しいのではない。全て、違う。そして、その違いには歴史がある。
四月一日　分かっています。
先輩　知識だけで分かったと言うのは、何も分かっていないのと同じだ。
四月一日　（鼻で笑う）その言葉、少し根性論の匂いがする。
先輩　（鼻で笑う）問題は現場だ。君が何を語るか。
四月一日　そうですね。どうしようかな。人間は知能もバラバラです。どうあがいても、差別は起きる。だからこそ、法律や制度だけは整備しておきたい。その気持は分かる。でも、こっちにもやらなければいけないことはある。
先輩　（間、レコーダーから、恫喝の音声が流れる）
四月一日　無断録音ですね。されてたのか。
先輩　危うく拡散されるところだった。
四月一日　ありがとうございます。（受け取ろうとする）
先輩　（渡さない）されてもよかったって思っていないよね。
四月一日　（黙っている）
先輩　けしかけてるの、やつあたりなの、知りたくなったの。なに？
四月一日　わからないですね。
先輩　八月朔日くんのことか。
四月一日　分からないんです、自分のことは。
先輩　彼のことも、メディアに殺されたと言う人はいるだろうね。

四月一日　わからないんですよ。
先輩　（間）考え続けろ。うまくやれ。（肩をたたき、レコーダーを渡し、去る）
四月一日　（肩をはらう）

四月一日、去る。

思恵、とまり。

思恵　今度、山にでも登ろうと思うんだけど、とまりもどう？
とまり　スニーカーで行けるところ？
思恵　厳しいところ。
とまり　やめときます。
思恵　えー。
とまり　私、海派なんで。
思恵　そう。
とまり　なんで山なの。
思恵　わかんない。
とまり　なにに目覚めたの。
思恵　目覚めたとかではないよ。前から興味はあったよ。
とまり　そう。
思恵　わたし馬鹿だからさ、高いところが好きなんだと思う。
とまり　それを言ったらわたしだって馬鹿になっちゃうよ。
思恵　（笑う）
とまり　なに笑ってんの。
思恵　理由のない笑い。

とまり　そういうものが、あるのは分かる。（思恵の頬を両手ではさむ）でもね、
思恵　ちょっと。ちょっとお待ちなさい。
とまり　（手をはなす）なんでしょう。
思恵　海なら来る？
とまり　行く。
思恵　じゃあ、行こう。
とまり　うん。（間）あと、自虐はやめよう。気高くない。
思恵　気高さ。
とまり　そう。
思恵　ふーん。（間）とまりは気高さにこだわるね。
とまり　わたしは気高さこそ、目に見えない最も美しいものだと思ってる。
思恵　なるほど。気高さって何？
とまり　（考える）そう言われると分からないな。
思恵　愛するものに、根拠はないよ。
とまり　そうかな。
思恵　わかんない。
とまり　そう。
思恵　だから、考える価値があると思う。
とまり　うん。

都、林が入ってくる。
勉強会。

思恵　中島敦の作品群なのですが、能力と人間性についての観察が興味深いなと思っています。
林　『名人伝』とか。

思恵　そうですね。名人伝だと、技術がある一定のレベルを超えると人間性が失われていくように見えます。弓の名人が、弓を使わず鳥を射殺す技を学び、木偶のようになって帰ってくる。最後は弓という言葉も忘れてしまうんですよね。

とまり　そうですね。

思恵　なんでしょう、バランス感覚というか、

林　世界のルールみたいな。

とまり　（とまりを指さして頷く）

思恵　世界のルールって聞くと、西遊記のアンソロジーのことも思い出しますね。

都　わかります。

林　私も好きです。

とまり　物質世界と、精神世界で分けられているわけではないんだけど、対比があるような気がしています。

都　そうですね。ものの名前は知らないけど、本質を知っている孫悟空と、いついかなる時も、幸福に死ぬ心を構えることができる三蔵法師、物質と精神の天才、そう言えなくはないですね。

林　どちらにもなれない魂がそれを見つめている。

思恵　観察眼も能力ですよ。

都　（腕を組む）

とまり　（腕を組む）

都　（間）お茶でも淹れましょうか。

林　ケーキでも切りましょうか。

とまり　あ、いいですね、手伝いますよ。

思恵　わたしも手伝います。

都　ああもう、みんな来ちゃった。

全員移動する。

肖像が入ってくる。

肖像は軽くストレッチを行う。

肖像　小さい頃は身体が弱かったんですよ、たぶん内臓が駄目なんですね。すぐお腹を壊していたので。目に見えるはっきりしたものより、目に見えない曖昧なもののほうに興味がありました。心の動きとか、知覚とか認識の隙間にあるようなこと。クラスで眼鏡なのは自分だけ、身長もすぐ周りの子達に追い抜かされてしまった。はっきりした答えが出るものよりも、曖昧で目に見えないものを愛していて、悪意はなぜ生まれるのか、どこからくるのか。なぜ人は変わってしまうのか、永遠不滅のものは存在するのかとか、そんなことばかり考えていました。で、そこから一度反抗期になって、不良仲間とつるんでいるときがありました。なんだろう、右翼の人たちを例える言葉に、ヤンキー的ってのを見かけるのですが、自分はちょっと違うと思っていて。感情的なつながりなのかな。ロジックもある。なんだろう。

記者が取材をしている、

肖像　日々のコミュニケーションがマインスイーパーみたいなんですよ。
記者　マインスイーパー？
肖像　地雷を探すゲームです。爆弾を踏めばゲームオーバー。
記者　（うなずいている）
肖像　正解もヒントもない状態で、地雷を踏まないように命がけのコミュニケーションをしてる。だから気が利くし、気がつくし、それ以外の時は疲れ果ててしまうし、自分も同じ方法で人を支配してもいいと思ってしまう。
記者　モラハラじゃないですか。
肖像　そうですね、今思うとそうだと思います。でも、コミュニティの中にいる人達も多種多様です。不機嫌さを隠そうとしない人もいれば、それを咎める人もいました。
記者　でも、それって。
肖像　アメとムチのマインドコントロールみたいだなって、今なら思いますよ。
記者　そうですか。

肖像　まあ、逃げるのは得意なので、今まで色んな人と仲良くなって話したり、色んな場所を渡り歩いてきました。
記者　そうなんですね。その、旅の中で印象に残っていることはありますか。
肖像　そうですね、砂時計をひっくり返し続ける人々とか、ミーアキャット養殖場に滞在した時のこととかですかね。
記者　え、なんですか、それ。
肖像　あ、ごめんなさい、詳しくはお話できないんです。
記者　それは残念です。
肖像　すいません。なので、今の話はカットでお願いします。
記者　わかりました。そうですね。（レコーダーを止める）こんなところですかね。
肖像　そうですか。
記者　はい。

間。

肖像　なんか緊張しました。なんというか、慣れないんですよね。いつも聞き手になることが多くて。
記者　そうですか。
肖像　はい。
記者　でも、聞くと、どんどん出てくる。
肖像　そうですか。
記者　ええ、こういったお話は普段されないんですか。
肖像　（少し考える）なんでしょう。（考える）なんだろう。何かに応える形じゃないと、出したくないのかもしれないですね。
記者　なるほど。
肖像　なんていうか、客寄せのように使うと、急に嘘っぽくなるというか、言い方がよくないな。うーん。跳ね返ってくると言うか。向いてないんですよ、多分。
記者　でも、あなたの話は、誰かにとって希望になると思います。

肖像　そうでしょうか。あの、宇宙に行った人とか、そういう存在のほうが、よっぽど希望になると思いますよ。

記者　いましたね。

肖像　僕にとっては希望でした。

記者　そうでしょう。でも、あなたはこの地上に居て、こうして生きてる。

肖像　嫌なことばかりですよ。地上は。

間。

記者　では、文字起こしデータが、来週くらいかな。上がってくると思うので、チェックをお願いします。

肖像　わかりました。

記者　できたらお知らせします。今日は本当にありがとうございました。

肖像　いえ、こちらこそ、ありがとうございました。

記者と肖像、握手をする。二人は別れる。

とまりと依子。

とまり　でも、文系には行かなかったんでしょ。

依子　うん。

とまり　どうして？

依子　（考える）食べてはいけないと思ったのかな。

とまり　そうなの？

依子　わからない。いや、そう思っていたな。

とまり　（聞いている）

依子　というより、その先が想像できなかった。

とまり　その先。
依子　十年先、二十年先。
とまり　想像つかないな。
依子　二、三歩先を見るだけのことは、許されていなかったのかもしれない。
とまり　誰に。
依子　誰なんだろう。
とまり　（腕を組む）

間。

とまり　お母さんはさ、文学が好きだったんでしょう。
依子　好きだったよ。でも、一生の仕事にしようとは思わなかった。
とまり　そう。
依子　というか、一生の仕事にしようと思うことが見つからなかった。
とまり　（沈黙）
依子　なにか、やりたいことがあるというのは恵まれたことだと思う。
とまり　そうかな。
依子　うん。恵まれている人間は、恵まれていることを自覚した方がいい。
とまり　それは分かるよ。
依子　うん。
とまり　でも、どうやって。
依子　他人にできることが自分にはできない。ここまでは分かるでしょう。
とまり　うん。
依子　あなたにできることが、他の人はできない。そういうことがある。
とまり　うん。

依子　自分のもっているものは、人を通さないとわからない。
とまり　そうかな。
依子　そうだよ、わたしがどういう人間なのか、あなたを通して知ることもある。
とまり　そうなんだ。
依子　そうだよ。
とまり　なるほど。

四月一日、電話をしている。

四月一日　だからさ、そうそう、もうニュースになってる。見た？　うん、そう。爆発。（間）わかんないよ。それ以上のことは、わからない。（間）それはこれからでしょう。なんでとか知らないよ。わかんないよ。（間）うん、まあそうだろうね。そうそう、そうだね。物語だね、物語がいっぱい出てくるね。やだね。（間）だからさ、僕たちはね、たくさんの物語を殺して、骨を拾い集めて、組み上げて、想像することしかできないわけ。必ずどこかが欠ける。（間）こっちだって大変なんだからさ。まだ大変じゃねえよ、これからだよ。（間）はいはい、意味なんてむなしいだけですね。（切る、ため息）

四月一日、去る。

都と林。バルコニー。

都　あ、涼しい。
林　涼しい。
都　（ため息をつく）
林　（腰を掛ける）

都　こんなに続くとは思わなかった。
林　（鼻で笑う）
都　続けてはいけないのかな。
林　なんでですか。
都　わからない。青踏が解散したのも、続きすぎだからって話でしょう。
林　まあ。
都　自分ひとりだけでは、怒りを燃やし続けることはできない。何年か燃え続けても、ふと消えてしまい、あるときまた火が灯る。燃え広がる。そうして思い出す。なんで忘れていたんだろう。なんて思ったりしてね。
林　仕方ないですよ。
都　仕方がないことかなあ。
林　生き延びるためですよ。多分。
都　個人がね。
林　そう、個人が。
都　（少し笑う）酔ってる？
林　少し。
都　急に喋るようになった。
林　パーティは苦手です。
都　うん。
林　ドレスコードも苦手です。
都　そうね。
林　ドレスは好きです。
都　（笑う）
林　なんで笑うんですか。
都　かわいい。
林　（笑う）意味わかんない。

都　真面目な人間はみんな面白くてかわいいよ。なんでわかんないんだろう。
林　みんな分かってますよ。でも、忘れちゃうんです。
都　うん。
林　あと、気持ち悪い褒め方が多い。
都　それは、ある。
林　都さんもかわいいです。
都　林さん。
林　なんですか。
都　酔ってるでしょう。
林　なんか、座ったあとに立つのってやばいですね。
都　（笑う）ちょっと水もらってくるね。
林　あ、一人にしないでください。

揉み合いになる。二人、笑う。

都　わかった、わかった。一緒に行こう。

二人、ゆっくりいなくなる。

施工と四月一日

施工　早く決めてくださいとは言いませんが、私を呼び出して質問をぶつけ続けるのは、どういうことですか。
四月一日　（腕を組んでいる）
施工　専門家の意見を聞きたいというのは真っ当だと思います。でも、話の中身がどんどん専門外の事になっていませんか。

四月一日　助かってる。
施工　でも腑に落ちない。私を呼び出しているからには、仕事があるんですよね。
四月一日　（頷く）
施工　なにか迷っているんですか。
四月一日　（間）ずっとそのことを考えている。いるけど、考えすぎて、岐路にさしかかってしまった。
施工　なんですか、岐路って。正しい道とか間違った道とか言わないでくださいね。
四月一日　（沈黙）
施工　あなたたちは、嘘をついていけないという縛りの中で、表と裏をはっきりさせて、決断し、手続きを行うのが仕事でしょう。（少しの間）だからか、あなたが仕事の話以外を求めるのは。
四月一日　（黙っている）
施工　なるほど。
四月一日　なにか一つのことを不要と判断することはできない。全てが必要なことで、なにか一つを切り捨てると、全てが不要になってしまう。
施工　それ、神になろうとしていますよ。
四月一日　え。
施工　利己と利他と、立場と領域を切り分けて判断するのがあなたの仕事でしょう。
四月一日　（頷く）
施工　バランスをとろうとすると、何もできなくなる。人間は偏っていないと。
四月一日　偏る。
施工　あなたは自分が思っている以上に情熱的で、夢想家で、感情的に動く。それ自体は問題ないんですけど、自覚がないのがまずい。
四月一日　何が。
施工　自覚のなさは肉体のコントロールに影響する。イメージと結果がずれるんですよ。こんなことは言いたくはないんですけどね。
四月一日　なるほど。

施工　で、我慢強い。
四月一日　（首をかしげる）
施工　我慢強さは美徳かもしれない。でも違う。我慢には限界がある。一度破綻すると、大きな力で周りを巻き込む。
四月一日　忍耐には目的がある。我慢にはそれがない。僕のは忍耐だよ。
施工　そうでしょうか。近代の政治家みたいなはっきりしたビジョンがない。
四月一日　心外だな。
施工　ないとは言ってませんよ。ただ漠然としている。それも仕方ない。情報量が増えすぎた。眼の前のことを調整していくだけで日が暮れる。
四月一日　施工さん、今の仕事辞めてこっちに来ない？
施工　（沈黙）
四月一日　冗談だよ。
施工　だといいんですけど。
四月一日　諸々のことをまとめて来ようと思う。
施工　まとめるのがいいことだとは思ってないですよ。
四月一日　そう。
施工　まずは、根っこにあるものをはっきりさせてください。
四月一日　（沈黙）
施工　なにがしたいんですか？
四月一日　（腕を組んでため息をつく）
施工　わたしはただの手段です。手段は目的に追従する。
四月一日　分かってるよ。
施工　今日はしゃべりすぎました。帰ります。
四月一日　また連絡する。
施工　決まってから、連絡してください。
四月一日　わかった。

施工は去る。

四月一日は静かに立ち上がる。

四月一日の演説。

四月一日　暴力によって言論の自由がうばわれる、そんなことがあってはいけないんです。そこから先がなくなる。人間は可能性です。私は可能性を見ていたい。言葉には言葉を、力で訴えかけてくるものには、力で応えようと思います。束になってかかってきても、集団ではなく、個人として問いかけます。
あなたは何をしたいのか。「殺してやりたい。」その先が聞きたい。関係のない人を巻き込むな。
何と何を天秤にかけようとしているのか。言葉で、言葉で届けてください。軍隊や警察が抑止力としてのみ機能することを願っています。我々はテロには屈しない。

拍手。

誰かが走ってきて、四月一日にぶつかる。二人共転倒。

誰かは刃物を投げ捨て、走り去る。

四月一日は立ち上がろうとするが、力尽きる。

とまりと思恵

とまり　平和って嫌い。

思恵　なに。
とまり　みんな、静かなものをイメージしている気がする。
思恵　ああ。そうかもね
とまり　何もない、音ひとつない、凪のような時間。何かが終わった後の余韻でしかない。
平和って、もっと騒がしいものだと思う。
思恵　わかるよ。
とまり　いかに良くするか、いかに困っているか、口角泡を飛ばして本質を突き詰めていく、前向きな戦いのはず。
思恵　戦い？
とまり　血は流れてはいけない。それは分かっている。
思恵　言葉は無力なんだと思ってしまうよ。
とまり　しーちゃん。
思恵　なにかが起きて、誰かが声をあげて、そのあとに言葉がある。後、後、ぜーんぶ後。
とまり　それぞれがそれぞれの理由で固く口を閉ざす。貝のように。
思恵　そうだね。（間）貝だったら、熱を加えると、開く。
とまり　その熱はなんだろう。ずっと考えているよ。そうして、たくさんの間違いが思い浮かぶ。
思恵　うん。

歩いてきた人、思恵が避けようとした瞬間に加速して、ぶつかり、突き飛ばす。

とまり　あ、ちょっと、おい。
思恵　とまり。

とまり、思恵、走り去る人を追いかける。

後輩が入ってくる。

後輩　先輩、先輩、起きてください。（四月一日を揺さぶる）
四月一日　なに、どうしたの。
後輩　なんでここで寝てるんですか。
四月一日　え。ああ。

四月一日、上体を起こす。

四月一日　ここ、どこ。
後輩　自分で思い出してください。
四月一日　ん。（思い出そうとする）
後輩　水持ってきましょうか。
四月一日　ん。お願い。
後輩　はい。（出ていく）

四月一日、しばし、あたりをきょろきょろする。
しばらくして、後輩は戻ってきて水を渡す。

四月一日　八月朔日くんは？
後輩　一緒だったんですか。
四月一日　うん。
後輩　先に出たんじゃないですか。
四月一日　そう。（立ち上がり、椅子に腰掛ける）
後輩　仲いいですね。
四月一日　まあね。

後輩　（沈黙）

四月一日　生まれが良くて、育ちが悪い者同士、相性がいいのかもしれない。

後輩　そうですか。じゃ、私はこれで。

四月一日　はい、おつかれ様。

後輩、去る。

四月一日、首を回す。

都。

都　暴力は、それに屈服した人間から主体性を奪い、ものに変える。争いは、人類の進歩とともに、様々なものに姿を変えてきました。優劣を競い、勝敗を決め、目的を通すための手段となったり、目に見える形から、目に見えないものまで、多くのことを巻き込み、わたしたちの周りを取り囲んでいる。暴力はなくならない。だから、人々は戦争反対を訴える。傷のような記憶を抱えると、口をつぐむ、言葉を失う、現在地を見失う。そういう仲間たちのための場所を私は作りたい。私が場所になりたいわけじゃない。切れ切れになったものが、ある時突然鮮明に蘇る。とても困った。もう少しだけ頑張りたいと思います。お話を聞かせてください。よろしくお願いいたします。（一礼）

思恵　（録画を停止する）あ、いいんじゃないですか。

都　そうですか？

思恵　見てみます？

都　はい。

思恵と都、椅子に腰掛けて動画を確認する。

警官が入ってくる。

警官　すいません、私、こういう者で（身分証を見せる）こちらにとまりさんという方、来ていませんか。

都　え。
思恵　とまりですか？
警官　はい。

都と思恵は目を見合わせる。

警官　こちらに来ていませんか？

とまり、出てくる。

とまり　あの、私がとまりです。
警官　一緒に来ていただいてもいいですか。
とまり　はい。わかりました。
都　あの、すいません、何が起きたんでしょう。
警官　少し、お話伺うだけですので。
都　教えてください。
警官　お時間はとらせないので。
とまり　みなさん、ごめんなさい。

とまりは警官に連れられ、行く。

先輩が入ってくる。

先輩　四月一日くん。
四月一日　先輩。

先輩　八月朔日くんのお別れ会、どうなりそう。
四月一日　調整中です。来月あたりかなと。
先輩　そう。
四月一日　決まったら、お知らせします。
先輩　わかった。（間）本当に残念だったね。
四月一日　言葉にならないですよ。
先輩　そう。
四月一日　未だに実感もないです。
先輩　そう。
四月一日　はい。
先輩　テレビ見てる？
四月一日　いえ。
先輩　元気なときの姿が繰り返し出てる。
四月一日　そうですか。
先輩　ちょっと前とは打って変わって。
四月一日　（沈黙）
先輩　よくできてる。
四月一日　なんなんですかね。
先輩　さあ。
四月一日　（沈黙）
先輩　（考える）媒体の人格が、主体的なものではなく、民意を写す鏡だとしたら。
四月一日　想像上の民意でしょう。
先輩　下世話な感情が呼び水になっているとしたら。
四月一日　そこは慎重に考えたいですね。

先輩　ああいうものに負けるわけにはいかないんだよ、我々は。（四月一日の背中を叩く）君のことは推しておく。じゃ、これで。

四月一日　お疲れ様です。

先輩は通過する。四月一日はゆっくり立ち上がり、去る。

とまりと警官

とまり　改めて話って何でしょう。私はもうお話できることはお伝えしました。

警官　申し訳ないんですけどね。あちらさんの話が、毎回変わるんです。

とまり　はい。

警官　それで、もう一度すり合わせをしようということになりまして。とまりさんも何か思い出したことがあるんじゃないかと思いまして。いいですか？

とまり　わかりました。

警官　ありがとうございます。あの日、あなたは駅のホームに立っていた。

とまり　そうです。その人は、私の友達に向かっていって、その子が避けようとした途端に走って体当たりをして、そのまま逃げようとしたので追いかけました。それから捕まえて、話を聞いてみようとしました。「なんであんなことをしたんですか」って。

警官　それで、その人はなんて言ってたんですか。

とまり　なにか言っていたんですが、何を言っているのかわかりませんでした。

警官　どういうことですか。

とまり　大きな声で、勢いよく喋りはじめました。でも、早口すぎて、ほとんど聞き取れませんでした。断片的に、「お前たち」とか「邪魔」とか、「ふざけんな」とか「死ね」とかそういう単語はあったと思います。

警官　それで殴ったんですか、自分の指の骨が折れるまで。

とまり　いえ、違います。まず、相手に胸ぐらをつかまれました。触られるのが嫌だったので、って、これ何回説明すればいいんですか。何度目ですか、あなた何人目ですか。

警官　私で最後です。

とまり　本当ですね。

警官　はい。

とまり　わかりました。

とまりの取り調べ、警官は調書を書き進める。

肖像と都と思恵

肖像　楽観的な人々が最も恐れるものは何だろう。

思恵　楽観的と言われること。

都　変化。

肖像　そう、変化。ただの変化には正も負もなければ保証もない。だから改善すると言う。手を握り、誓う。

都　でも、その前にするべきことがある。

思恵　なんでしょう。

肖像　全国津々浦々を渡り歩き、出会い、話を聞き、手を握る

思恵　最も大事なことですね。私たちは連帯しなければいけない。そして、連帯は責任を分割するものではなく、全体で所有するものでなければいけない。そのため、平等であること、公平であることが同時に成り立たなければいけない。難しい道ですね。

肖像　手順は分かりきっている。

都　でも、向こうは、もうやってる。

思恵　あとは、仕組みを作って流してみる。うまく行かない箇所は治してまた治す、その繰り返し。地味だね。

都　地味なもんですよ。

肖像

間。

肖像　とはいえ、言葉は届かない。手紙でも駄目、公開質問状も駄目、署名しても受け取り拒否、デモは報道されない。事件を起こせば愉快犯として報道され晒し者。あとは何でしょう。

都　（沈黙）

肖像　暴力に訴えるのは駄目、徹底的に弾圧される。

都　（ため息）

肖像　理不尽さに一度従うと決めた人間は、従わない者に対して腹を立てる。

都　（黙る）

肖像　それから、知らないものを恐れる。

都　ええ。

肖像　その恐怖が極限に達すると、個人でいられなくなる。集団と一体化しようとする。満員電車のような密集地帯に入り込む。

都　わかりますよ。

肖像　どうしたもんですかね。

肖像は去り、都も去る。

とまりが入ってくる。

とまり　これは戦争なんだよ。私達は絶滅戦争を仕掛けられている。

あってはならないと、存在そのものを否定されている。いや、違うな。人間様に迷惑をかけないのだったら、近い待遇で生きることを許してもいいって言われてる。穴を掘って隠れる人と銃を撃つ人にわかれて、戦ってる。銃弾が飛んでくる。中立の人なんていない。

思恵　中立の人はいるよ。
とまり　いない。見ているだけの人間は、加担している。
思恵　中立の人がいない状況も分かるよ。
とまり　しーちゃん、絶滅戦争は駄目なんだよ。
思恵　絶滅戦争が駄目なのは知ってる。
とまり　根絶するまで終わらないんだよ。（間）同じ人間に間違い扱いされて殺されてたまるかよ。
思恵　落ち着いて。
とまり　何のんきなこといってんの。
思恵　とまり。
とまり　戦って。
思恵　とまり。
とまり　一緒に戦って。
思恵　とまり。
とまり　戦って。
思恵　どうするの。
とまり　え？
思恵　どうやって戦うの。
とまり　（沈黙）
思恵　私はとまりのことが心配だよ。塞ぎ込んで黙ったかと思えば、大きな声で何かを徹底的に糾弾する。
とまり　しーちゃん、相手の言い方を責めるのはさ、
思恵　トーンポリシングでしょう。知ってるよ。脊髄反射になってるよ、そういうの。近づこうとすると針が出てくるみたい。別に触ろうとしてない。
とまり　でも、

思恵　遮らないで、まだ話してる途中だから。相手を黙らせる話し方になっているよ。議論というより、ただ勝つためだけの話し方。私達はそれを嫌っていたんじゃない？　わかりやすい、単純で、恐怖や不安を煽るような、そういう言葉。

とまり　しーちゃんは、（間）殺されたいのか。

思恵　え。

とまり　そうやって、呑気なことを言っていると、みんな、死ぬ。

思恵　何。

とまり　わたしは殺されたくない。

思恵　何、何に殺されるの。

とまり　仕組みだよ、わかんないのかよ。

思恵　聞いてるんだけど。

とまり　え、何、なんなの。シーライオニングですか。

思恵　違いますけど。

とまり　わたしが世の中良くしようとしているの、なんで邪魔をしようとしているんですか。

思恵　いきなり噛み付いてきてそれ何、私とまりのこと心配して、

とまり　もういいです、話すことはないです。失礼します。

思恵　ちょっと。

とまり、去る。

都が来る。

都　思恵さん、大丈夫？

思恵　いえ、私よりも、とまりの方が。（間）話せました？

都　少し話せました。

思恵　（待つ）

都　勉強会はしばらく休むそうです。
思恵　そうですか。
都　それから、自分の言動が攻撃的になっていることを気にしている様子でした。
思恵　はい。

間。

都　明らかにおかしくなったように見えても、それ自体が抑圧への抵抗として現れるなら、それは正常なことだと伝えました。
思恵　そうですか。
都　もし、何かあれば、お知らせします。
思恵　はい。ありがとうございます。
都　少し、話していきますか？
思恵　いえ、今はちょっと、一人で考えたいです。
都　わかりました。話したくなったらすぐ連絡してください。
思恵　ありがとうございます。

都、去る。

アンダーと肖像。

アンダー　形の問題ならなんとかなりますよ。人間の目には補正機能がついていて、視覚は言語で補われる。２つセットで世界を認識している。
肖像　確かに、そうかもしれない。

アンダー　角膜を移植された直後の人間は目が見えないと聞きます。目に映るものと視覚がまだ結びついていない、世界の本当の姿が見えているんじゃないか。そういう説もあります。

肖像　ロマンがありますね。

アンダー　「よく分かっていない」の一言に尽きます。

肖像　（鼻で笑う）よくわからないことほど面白いものはないですよ。

アンダー　余裕があれば。

肖像　そうですね。（間）名前、短くしたんですね。

アンダー　はい。

肖像　略したんですか、それとも、変えたんですか。

アンダー　変えたんですよ。

肖像　前は、たしか。アンダースタディ。

アンダー　今はただのアンダーです。学ぶことはなくなって、アンダー。ただのアンダーです。

肖像　なにが変わったんですか。

アンダー　やることは変わっていません。

肖像　そう。

アンダー　はい。

肖像　あなたに成り代わって欲しい人がいます。

アンダー　わかりました。工務店は呼びますか？

肖像　必要ありません。

アンダー　そうですか、本人は？

肖像　だいぶ弱っている。だから時間の問題かな。

アンダー　病気ですか。

肖像　そうかもしれない。でも、そういうことでもない。

アンダー　分からない。歩きながら話しましょう。

肖像　そうですね。

医師。

思恵　いなくなってしまった人のことをよく考えるんですよ。
医師　いなくなってしまった人。
思恵　わたしの人生からいなくなってしまった人。もうこの世にはいない二人のおじいちゃんの優しさの違いとか考えたりして、最近ようやく理解できたことがあって、わたしの目から、わたしのものじゃない涙がこぼれる。
医師　そうですか。
思恵　あと、この世にいるけど、連絡が取れなくなってしまった人のことも考えます。
医師　そうですか。
思恵　仕事、結婚、出産、仲違い。いろいろあるんですけど。一方的に切られてしまったあとに続いている時間を終わらせる方法はあるんでしょうか。
医師　（考える）難しい問題ですよね。
思恵　はい。
医師　私も経験があります。薄く、淡い共存が今も続いている。
思恵　はい。
医師　どう終わらせたいですか？
思恵　え。そうですね。（間）こっちは切られたわけですから。
医師　はい。
思恵　決めつけるようなことをして、わたしの中から完全に排除したくはないです。余白は残しておきたい。でも、そこにとらわれないように、自分の時間を優先したい。
医師　合理的ですね。
思恵　そうですかね。

医師　そうです。今言ってもらったこと二つに優先順位はありますか？
思恵　わからないです。
医師　それを考えてみてください。
思恵　そうですね、そうしてみます。

医師、去る。

記者のレポート。

記者　今年7月、駅の構内で、一人の男性が女性から暴行を受け、軽症を負うという事件が起きました。この女性に対する非難の声が強まると、女性は自身の顔と名前を出して男性を“ぶつかりおじさん”だと糾弾する動画を公開。この動画は拡散され、「私はとまりだ」と声をあげる人々が急増。その後、匿名のインターネットユーザーにより、顔と名前、住所が特定されてしまった男性に対しての中傷が後を絶ちません。また、誤った個人情報の拡散によって、被害を受けた方も出始めています。なお、動画配信者達による「ぶつかりおじさん狩り」と称した動画の投稿も増加しています。

都、思恵。

都　とまりさんが不起訴で済んだのは、相手の男性が軽傷で済んだこと。それから目撃者の証言があったこと、そこから余罪がぽろぽろと出てきたことが大きいです。それから、とまりさんは被害者たちとつながりをもち始めた。
思恵　どういう人達ですか。
都　私達と目的は同じですが、手段が違う。
思恵　そうですか。
都　拠点をもっている集まりというわけではないんですが。なんていうんでしょう。防衛本能が強い。
思恵　（沈黙）

都　会えませんでした。ごめんなさい。
思恵　謝らないでください。

記者、現場へ。

記者　こちらはとまりさんが所属していたとされる団体の集会所です。代表の方にお話を伺いたいと思います。とまりさんはどういう方でしょう。
都　（沈黙）
記者　とまりさんは現在も所属されているんですか。
都　（沈黙）
記者　とまりさんにお伝えしたい事などありますか。
都　（沈黙）
記者　どうして何もおっしゃってくれないんですか。

沈黙の対峙。

記者　それではスタジオにお返しします。

記者、都を二度見した後、去る。

思恵　都さん、ごめんなさい。何か、すればよかったと思ったんですけど、何もできませんでした。
都　（首を横に振る）
思恵　あの人達に自分の言葉を渡したくなかった。
都　私は、突然場を与えられて、喋りそうになってしまった。
思恵　でも、あなたは何も言わなかった。

都　そう、言わなかった。（間）同じだ。

肖像が加わる。

肖像　集まりとしては大きくなっている印象があります。勢いがあるって言ったほうがいいんですかね。
思恵　でも、今のところ、何もしていない。それが怖いなと思うんですよ。
肖像　まとまっていないのか、まとめている最中なのか、それとも何か、準備をしているのか。
都　考えたくないですね。
肖像　敵か味方しかいないから、言葉が通じないときがある。
都　（沈黙）
思恵　被害者たちの集まりなんですよね。専門家とかは入ってるんですか？
肖像　法務関係はいるんじゃないかな。
思恵　医療関係者は。
肖像　わからない。僕の仲間が入り込んだけど、連絡がとれなくなった。
思恵　そうですか。
肖像　意見は１８０度違うけど、集団の質としては保守の連中と同じだよ。
思恵　え？
都　傷と感情で繋がっている。仲間が窮地に立たされたら、その人がどんな悪事を働いていたとしても、正当化して守る。
肖像　そう。
思恵　（沈黙）
都　思恵さんはどうしたいですか。
思恵　（間）考える必要のあることが多すぎて。
都　そうですね。

とまりとその側に林。

とまり　私の知っている男性に二人ほど、「自分はレイプの濡れ衣を着せられたことがある」と言う人がいました。一人は裕福な家に生まれ育った若い人で、彼を訴えた若い女性は、彼から財布を盗んで逃げました。彼女が訴えた被害の現場に彼はいなかったし、証拠となるものは彼女の証言だけだった。彼女の発言はその多くが偽りだった。もうひとりの男性は、働き盛りの中年で、言葉の扱い方がうまく、嘘つきだった。法律の隙間をすり抜けるようなやり方で、レイプだと定義されないようにセックスをしていた。彼と関係を持った人はみんな同意をしていたし、自分が自由意志で主体的に選択した結果だったと思い込んでいた。時間が経ち、男のやり口を知り、自分のされたことを知った時、証拠はどこにもなかった。この人はレイプの罪で裁かれることもなく、同じことを続けている。聞くところによると、今はフェミニストと名乗っているらしい。こういう話はよく聞く。

私の知っている女性にはレイプされた言う人はたくさんいる。多くは女性で、たまに男性もいる。でも、告訴したり通報する人はだれも居なかった。友達から友達への告白と、事実の受け止めがあるだけだった。通報を行って、諦めるように説得された人もいる。基準となる法律のいくつかは、実情とかけ離れた骨董品で、男の警察官たちや、保守系の政治家たちは、レイプは見知らぬ他人が行うもので、被害者は激しく抵抗するとか思ってる。親しい関係の中で起きてしまい、大して抵抗できなかったり、後からおかしいことに気づくことがあるって知らなかったりする。おかしい。おかしいとは思われてきた。でも、見て見ぬふりをされてきた。目をつぶってやり過ごされたこともある。今までは黙って見送ってきた。意志も力も弱かった。でも、見送るが見捨てるになりかけたとき、このままではいけないと思った。私は変わりたいと思った。変えたいと思った。みなさん、力を貸してください。

雨の音が聞こえる。

とまり　ありがとう、ありがとう。

とまりは鼻をすすりはじめる。

林　涙。（とまりにサングラスをかけてあげる）風も出てきた。（スカーフを巻いてあげる）

とまり　ありがとう。

とまりは去る。

依子。

依子　ある日、友達と電話しながら歩いていると、鬼のような表情でとまりが近づいてくるのが見えた。目があった瞬間、あの子は我に返ったような表情をして、そのまま硬直していた。断りを入れて電話を切り、娘に近づいてどうしたのかと聞くと、手帳型のスマホケースを開いて耳にあてていたのが、氷嚢をこめかにあてていたように見えたと言った。（間）思い出したくはないが、過去に、そうしていたことは何度かある。とまりはその度に、怒りをあらわにしていた。わたしは、娘の姿から、人間が本来持っているものについて学びました。あの子が生まれてから、あの子と私の間に境目はなかった。私の一部だったし、そう伝えていた。ある日、あの子は私にどうしてそんなことを言うのか、どういう実感があってそう言うのか問い、私は自分の体の感覚と記憶、その所感をもって答えました。自分の臓器の中から発達していく生き物と、その生き物に体を変えられていったこと。食の好みまで変わった。そうしたことを語った後、あの子は「そう」とだけ言って、寝室に戻っていった。

林。

林　活発なのですが、思慮深い人だと思いました。若くて力も有り余っていて、だからこそ失言もある。でも、すぐに反省して、自分を改善しようとする。真っ当といえば真っ当なのですが、そういう人はなかなかいない。もちろん心配なところもありました。

これは私の勝手な想像なので、聞き流してほしいことなんですが、とまりさんは、知識を必要としているように見えました。そのくらい知ることに対して貪欲だった。知識を得ることに一つメリットがあるとすれば、過去の体験に名前がつき、知識のもとに体系化される。そうすると、記憶や経験が秩序のもとに整理されて、傷があらわになる。見つめることができる。そうしてようやく前に進むことがあるんじゃないかと思うんです。

依子　そうですね。そうだと思います。でも、（間）まだまだ子供ですね。あの子は。ごめんなさい。ご迷惑をおかけして。

林　いえ、そんなことはありません。

依子　そうですか。

林　何かが起きてしまった後、一緒に怒りを表す人が必要な人はいます。

依子　それはわかります。私もそうだったから。

林　目に見えないことを分けて考えるのは困難なことです。

依子　わかります。

林　会っていきますか。

依子　いえ、今日は帰ります。

林　そうですか。

依子　また、お会いしましょう。

林　はい。

依子は去る。

思恵が入ってくる。

しばらくして、肖像が入ってくる。

肖像　思恵さん。

思恵　肖像さん。

肖像　都さんは？

思恵　いま、買い物に行ってます。

肖像　そう。タイミングがいいね。

思恵　（首をかしげる）どうしたんですか？

肖像　いや、ちょっと挨拶に。

思恵　（わからない）そうですか。
肖像　こんなタイミングで申し訳ないんだけど。
思恵　なんですか。
肖像　少しの間、旅に出ることになりました。
思恵　そうですか。
肖像　そ、実はちょっと体に限界がきていまして。少しばかり休みが欲しくて。
思恵　いいんじゃないでしょうか。
肖像　そうですか。
思恵　少し、さみしくなりますけどね。
肖像　そう。ありがとう。
思恵　お土産、期待してもいいですか？
肖像　どうだろうな。
思恵　（首を傾げる）
肖像　とにかく、帰ってきたら僕は別人になっていると思ってほしい。
思恵　はあ。
肖像　しばらくは連絡がとれないと思う。
思恵　大丈夫です、ゆっくり休んでください。
肖像　ごめんね。
思恵　（？）いえ。
肖像　じゃあ。
思恵　とまりのこと、私達のこと、相談に乗っていただいてありがとうございます。
肖像　久々に色々な話ができて良かったよ。
思恵　こちらこそ。
肖像　じゃあ、元気で。

肖像、去る。去り際、アンダーが現れ、肖像の肩を抱いていなくなる。
とまりと思恵

思恵　とまり、ちょっと手を出してみて。
とまり　なに。（手を出す）
思恵　見てもいい？
とまり　いいけど、なに。
思恵　（鼻で笑い、とまりの手を両手でとり、見る）
とまり　（首を傾げる）
思恵　（とまりの手のひらと自分の手のひらを合わせる）
とまり　なに？
思恵　なるほどねえ。
とまり　どうしたの。
思恵　昔ピアノを習っていたことがあってね。
とまり　うん。
思恵　先生の家にリストの手を象った彫刻が置いてあった。
とまり　うん。
思恵　めちゃめちゃでかい。
とまり　そう。
思恵　ピアノの能力は手の大きさだと思っていた。
とまり　そんなことないでしょう。
思恵　今ならそう思えるんだけどね。
とまり　うん。
思恵　手が大きければ大きいほど、遠くの音に触ることができる。ずっと楽しくて続けていたんだけど、先生がレッスンで毎回怒り始めるようになってから、嫌になってしまった。

とまり　うん。

思恵　私も良くなかった。興味のあることが増えて、ピアノの前に座る時間がどんどん少なくなっていって。何をしていたんだと言われることも増えたし。練習していないのがバレるのが嫌で、雑談をしてレッスンの時間をやりすごそうとしたりした。

とまり　（鼻で笑う）

思恵　ある日、先生と話をしてみた。レッスンのゴールについて。私は特に目的地を持っていなかった。はじまりもそうだった。すぐに上達してよく褒められたのが気持ちよくて続けているだけだったし、その先は特に望んでいなかった。

とまり　うん。

思恵　でも、先生はそうじゃなかった。私を大学に入れようとしていた。それを聞いて耐えられなくなってしまったのかな。でも、あんまり覚えていない。はじめて未来のことをしっかり考えたかもしれない。なんか、一つのことを突き詰めていくことが、ほかの雑然としたものを捨てることのように思えてしまって、それで、辞めた。

とまり　うん。

思恵　ごめん、すごい喋っちゃった。

とまり　大丈夫。

思恵　うん。ありがとう。

間。

とまり　もし、今も続けていたらって考えることはある？

思恵　（考える）ないね。（間）ない。

とまり　（笑う）そ。良かった。

思恵　うん。

とまり　良かった。

思恵　うん。

とまり　良かった

思恵　良かったって何回言うの。
とまり　ごめん。
思恵　ありがとう。とまり。
とまり　（笑う）

都と林。

林　わたしはわたしなりに学んだことを還元できる場にようやく出会えたという感じです。
都　そう
林　なにか変わっていっているのだろうか。
都　わからない。
林　わからなくていいんですか。
都　ものごとを変えるには、問題の奥深くまで潜り、その中心に働きかける必要がある。
林　そう言っている人はたくさんいます。でも、成し遂げられたことは僅かです。（間）何もなかったかというとそういうことでもない。
都　（頷く）
林　ただ、私は耐えられなくなってしまった。風の吹かない日々と、雨に打たれる日々が続くばかりです。
都　（頷く）
林　動く人に、後のことを託して去るようなことはしたくない。
都　（沈黙）
林　ただ、これで良いのだろうか。
都　（腕を組む）
林　なにか、後戻りのできないことを強いているのではないか。
都　私達は過去に学び、今を考えてきた。悠長だとか、呑気だと言われることもあった。手詰まりになりつつあるのも分かっている。言葉に頼りすぎたよ。私は。

林　あなたはそれでいいよ。
都　肯定しないでよ。改善したくなる。
林　（笑う）真っ当だな。
都　真っ当で悪かったね。

二人、笑う、暫くして。

都　じゃあ、行くね。
林　（頷く）
都　とまりさんをよろしく。
林　わかりました。じゃあ、また。
都　うん。

都は去る。

林　とまりさん。
とまり　（答えない）
林　後悔していますか。
とまり　わからない。
林　そう。
とまり　まだ途中だから。
林　どうしましょう。これから。
とまり　（考える）
林　あなたは、行動した人だから、支持を集めている。
とまり　行動。

林　動いた方がいい。
とまり　林さん、わたしたちは二人だよ。支持されているのかわからない。声が寄せられているだけ。
林　二人だからいいんですよ。実体として規模の大きな組織があると、狙われやすい。
とまり　そういうのは、向いていないよ。
林　この前のあなたの言葉、どれだけ拡散されたと思っているんですか。
とまり　（答えない）
林　次の一手、私も考えておきます。

林は立ち上がり、去る。思恵は眠っている。
クラブ。

思恵　（目を覚ます）
とまり　あ、しーちゃん、起きた？
思恵　うん。眠い。
とまり　（思恵を見る）どうする？　もうちょっと休む？
思恵　うん。

男がやってくる。

男　お姉さんたち、二人できたんですか。
とまり　そうだよ。
男　今、休憩中？
とまり　そう。
男　一緒にあっちで踊りませんか？
とまり　えー、休憩中だって。

男　今日、友達が回してんすよ。
思恵　（目覚めて）友達って、あの、（指をさす）壁と話してる人？
男　（振り返って、笑う）違うって。
思恵　そうだよな、あの人は壁が友達だもんな。
男　お姉さん、面白い人っすね。
思恵　わたしはつまんない女だよ。

とまりは思恵に「ちょっと」とか、「しーちゃん」等、声をかけていた。
男は二人のそばに腰掛ける。

男　音楽は好きですか。
とまり　それなりに。
思恵　好きだと思う。
男　どんな音楽が好きですか。
とまり　ジャズ。
思恵　クラシック。
男　なんでここ来ちゃったんですか。
とまり　色んな音楽が好きだから。
思恵　そうそう。
男　いいですね。
とまり　お兄さんは何が好きなの。
男　僕は、ハウスが好きですね。
思恵　ただのハウス？
男　ディープ・ハウス。
思恵　ああ、いいね。私も好き。

男　いいですよね。

曲が変わる。

思恵・男　あ。
男　知ってます？
思恵　知ってる知ってる。
男　行きましょう。
思恵　とまり。
とまり　私はいいや。
思恵　そ。
とまり　うん。

男と思恵はいなくなる。
アンダーが肖像として現れる。

アンダー　（とまりの顔を指差す）サングラス、似合ってる。
とまり　ありがとうございます。
アンダー　それで、話というのは。
とまり　肖像さんはメトロをどのように運営していますか。
アンダー　（考える）運営っていうほどの運営はしてないですね。
とまり　そうなんですか。
アンダー　みんな長い付き合いだから、つながっている。その形式が変わってきただけ。一人で出歩くと危ないし、仲間同士で集まっても嫌がらせを受けるし、だからいつの間にかビデオ通話で話すようになったんですよ。だから、ワイワイや

るというより、時間を掛けて一人ずつ喋る感じだし、時間を決めて会議をすると、なかなか雑談もできなくなってしまった。今や僕以外全員画面オフです。

とまり　そうなんですね。

アンダー　集まるの？

とまり　はい、みんなに喋ってもらおうと思って。

アンダー　大丈夫？

とまり　わかんないですけど。

アンダー　まずはつながるってのは大事かもね。

とまり　はい。

アンダー　うまくいくことを祈ってるよ。

とまり　はい。

アンダー　物理的な力になれなくて申し訳ない。

とまり　いえ。

アンダー　また何かあれば連絡ください。

とまり　ありがとうございます。

とまり、去る。

肖像（アンダー）と都。

都　いま、なんて言ったんですか。

アンダー　国政に打って出ます。

都　本気ですか。

アンダー　本気です。

都　後援は。

アンダー　前から声は掛けられていたんです。でも、なかなか踏ん切りがつかなくて。

都　メトロはどうするんですか。
アンダー　あそこは僕がいなくても回りますよ。
都　え。
アンダー　10年分のビデオミーティングのリマインダーを設定しておきました。
都　いや。
アンダー　集まりが集まりを求めるなら、そこに場所はあるんですよ。
都　そういうことでは、
アンダー　分かってます。ないものとされている人間が人前に出ていくんです。見て見ぬふりは続くでしょう。
都　（沈黙）
アンダー　道理も筋も曲がったまま。ただ、どこかで破綻するだけ。僕のすることは、いつ破裂するか分からない風船に思い切り息を吹き込むことです。僕のささやかな心肺機能は、この一吹きでおしまいかもしれない。まあ、でも、やってみます。駄目だったらまたみんなと話しながら考えますよ。決定的な一撃を加える瞬間を待ち続ける日々は終わりです。では、お元気で。パレードの話はつけてあります。
都　ありがとう。本当にありがとう。

アンダーは去る。
記者、とまり

記者　その、宿泊施設の中では携帯電話は禁止なんですよね。
とまり　制限しているのはスマートフォンです。
記者　デジタルデトックス、みたいなものでしょうか。
とまり　そういう部分もあるとは思うんですけど、ダメージを負っているときはどうも攻撃的になってしまうというか、売り言葉に買い言葉になってしまうので、直接、言葉を交わしながら言葉を探してもらっています。
記者　なるほど。共同生活の中で大変なことはありますか。
とまり　毎日が大変ではあるんですけど、それでも、外に出るよりはちょっとマシだというか。

記者　心無い言葉を浴びることも。

とまり　はい。集団洗脳とかカルトとか、そういう声があるのは知っています。でも、自分のしていないことについて、知らない人から批判を受けるというのは、昔からあることです。

記者　なるほど。（間）今後の展望などお聞きしてもよろしいでしょうか。

とまり　今後ですか。なんでしょう。ずっと目の前のことをやっていたので、目標でもいいですか。

記者　もちろんです。

とまり　ここの中と、外の出入り口をもっと安全にすること、ですかね。

記者　出入口ですか。

とまり　そうです。扉を開けるかどうか揉めている間に、息絶えていく人がいます。必要とする人のために開けておきたいんですけど、石を投げる人が近づくこともあるし、迎え入れた人がまわりを傷つけることもある。

記者　（沈黙）

とまり　そういうことは、なくならないと思います。だから、どう最適化するか。なにが最適化なのか。話し合っていく必要があると思います。

記者　（沈黙）

とまり　もう少しマシな世界になれば、私達は外で思いっきりおしゃべりを楽しむことができる。政治や哲学の話をして、好きな格好をしてでかけて、一人でも、大勢でも、昼でも夜でも。歩いているだけで見た目についてささやかれることがない。あと、「お前たちが大人しくしていれば外はいくらでも歩ける」って言う人がいなくなればいいなと思っています。

記者　そうですね。それではとまりさん。ありがとうございました。

とまり　ありがとうございました。

記者は去る。林の声が聞こえる。

林　ここは山の上。避難小屋があって、岩が切り立っている。雨が降れば風も吹く、雪が降ると雪崩がおきて、雷が落ちると人は一瞬で死ぬ。熊も出る。

とまり　わかってるよ。（間）わかってる。

アンダーと施工

施工　それで、肖像さんはどうなりました。
アンダー　お隠れになりました。
施工　そう。
アンダー　疲れてしまったそうです。
施工　そう。戻ってくるんですか？
アンダー　いえ。あの人はもう降りたので。
施工　そう。あなたは？
アンダー　（自分を指差し、首を傾げる）
施工　（頷く）
アンダー　（腕を組み、考える）
施工　これからどうするんですか。
アンダー　引き受けたところまではしっかりやりますよ。
施工　（首を傾げる）
アンダー　期間は決まっているんです。
施工　そう。
アンダー　はい。
施工　そこから先は？
アンダー　どうしようかな。
施工　（腕を組む）
アンダー　元々、無いようなものだから大丈夫と言われたけど。
施工　（沈黙）

アンダー　そんなことはないだろうって感じです。
施工　なるほど。
アンダー　いざ、なってみると、できることが多い。
施工　そう。
アンダー　顔は広く、頭も切れる。追い詰められて疲れ切った人間だから、些細な変化に敏感で。
施工　そう。
アンダー　あと、あなたに頼んでみるかって話も出ていた。
施工　そうなんですか。
アンダー　そう。しなかったけど、そう。そういう手段が選択肢にある人間だった。
施工　なるほど。
アンダー　だから、こうなることもきっと予想していた。
施工　そう。

施工は立つ。

アンダー　意外と悪いやつですよ、肖像は。
施工　（沈黙）
アンダー　だからこの瞬間にも準備が終わっている。
施工　あなたは、どう思っているの。
アンダー　僕か。もうなってしまったから、切り分けて考えることはできないな。今までに味わったことのない気分だよ。
施工　どんな気分？
アンダー　いい気分かもしれない。
施工　そう。
アンダー　これからどうなると思う？
施工　わからないよ。こっちは自分がやることと、その結果しか分からない。

アンダー　大勢の仲間たちが、一斉に外に出て、声を上げ始める。無視できないくらい。僕の名前をみんなで叫ぶだろう。
施工　君はこれからいなくなる。痕跡も残らない。
アンダー　必ず残る。なかったことにはならない。
施工　そうだとしても、人間は忘れていく。
アンダー　忘れたことは、思い出すことができる。
施工　一人では難しい。
アンダー　こっちは大勢いるから、誰かひとりでも、思い出せばいい。
施工　（鼻で笑う）そう。
アンダー　（鼻で笑う）
施工　停滞していたものが、少し動く。
アンダー　（頷く）言葉を預かってる。
施工　そう。
アンダー　己の愚を知れば則ち愚にあらず、己の愚なることを知らなければ是が眞の愚である。民を殺すは國家を殺すなり、法を蔑にするは國家を蔑にするなり、人が自ら國を殺すのである。
施工　ご苦労さまでした。（アンダーに布をかける。電話を取り出し、かける）はい、施工です。終わりました。あとのことも大丈夫です。

しばらくして、四月一日が現れる。

四月一日　お疲れ様。
施工　お疲れ様です。
四月一日　ありがとう。
施工　（沈黙）
四月一日　良かった。
施工　良かった？

四月一日　良いんだよ。結果はこれから引き寄せれば良い。
施工　（沈黙）
四月一日　どうせ、あとのことを想定して、構成員たちになにか仕込んでいるんだろう。
施工　そうです。そう言ってました。
四月一日　やっぱりな。
施工　分かるんですか。
四月一日　なんとなく。勘だよ。
施工　そうですか。
四月一日　ぼんやりとした予感が、はっきりと形になったというか、覚悟が決まったと言うか。
施工　そうですか。
四月一日　できることが急に増えた感じがある。（腕を組んで頭をひねる）
施工　どうしたんですか。
四月一日　最後の最後まで、手落ちがないか、考え続けてる。
施工　矢は、思いがけないところから飛んでくる。
四月一日　知ってるよ。
施工　それから、言葉を預かっています。
四月一日　いいよ、受け取らない。
施工　そうですか。

四月一日と施工は去る。

依子と思恵。

思恵　なんていうか、タイミングがいいんですよね。助けが必要ってわけでもないんですが、ちょうどいいときに声をかけてくれる。私はあんまり顔に出ないから。

依子　そうなの？
思恵　（両手のひらを頬に当てる）出ますかね。
依子　出てはいるんじゃない。
思恵　そうですか。
依子　（鼻で笑う）
思恵　（鼻で笑う）とまりさんにはけっこう助けられているんです。
依子　そう。
思恵　はい。
依子　本当？
思恵　本当ですよ。
依子　迷惑かけてない？
思恵　そんなことないですよ。
依子　そう。
思恵　あったとしても、お互い様です。
依子　なるほど。人を見る目はあるんだな。
思恵　何言ってるんですか。
依子　私にはないんだよ。見る目が。
思恵　何を言ってるんですか。
依子　しーちゃん。ありがとうね。感謝してる。
思恵　それはこっちの台詞ですよ。
依子　私もとまりも、しーちゃんに助けられてる。
思恵　そう言ってもらえると、ありがたいです。
依子　おいしいもの、食べに行こう。
思恵　（頷く）

間。

依子　あれからとまりと会ったりした？
思恵　この前、会いました。
依子　そう。
思恵　あの後、連絡をとってみて、少しやりとりをして、で、久しぶりに会って。
依子　そう。
思恵　大人になったと言うか、欠けていたものが、少し埋まった感じがしました。
依子　そうか。なるほど。いいことを言うな。
思恵　（分からない）今度、海に行く約束をしていたんです。
依子　そうなの？
思恵　前も海だったんですけど。
依子　そう。
思恵　はい。
依子　そうなんだ。
思恵　（沈黙）
依子　昔、よくとまりを連れて海に行ったな。
思恵　そうなんですね。
依子　うん。

間。

依子　しーちゃん、これからも、とまりをよろしくね。
思恵　はい。

依子は去る。思恵は残っている。
とまり。

思恵　（指をさす）サングラス、似合ってる。
とまり　ありがとう。

間。

とまり　会いに来てくれるとは思わなかった。
思恵　自分でもびっくりしてる。
とまり　そう。
思恵　最近はどう過ごしてる？
とまり　毎日バタバタしてる。色んなところに行って人に会ったり、連れてきたり、話をしたり。前と変わらないかもしれない。
思恵　そう。
とまり　うん。
思恵　依子さんには会った？
とまり　うん。ちょくちょく連絡はとってる。
思恵　そう。
とまり　うん。思恵は？
思恵　そうね。私は大学の方が忙しくなってきて。
とまり　そう。
思恵　うん。でも、充実はしてる。
とまり　良いね。
思恵　私はあんまり変わんないな。

とまり　そうなんだ。
思恵　うん。実験で使う鳥のお世話をしてる。
とまり　そう。鳥って、文鳥とか、鳩とか？
思恵　そう。よく知ってるね。
とまり　たまたまだよ。
思恵　そう。
とまり　鳩の迷信行動とか。
思恵　そうそう。
とまり　へえ。
思恵　言語の聞き分けもできるんだよ。
とまり　そうなんだ。
思恵　うん。

間。

思恵　最近、たまにだけど、どうしてこの分野なのかって、聞かれることがあって。
とまり　うん。
思恵　それらしいことを言うけど、本当のことは言えないなって。
とまり　言わなくていいよ。
思恵　そう思っているんだけど。なかなか。
とまり　うん。
思恵　人間は、自分を救ったもので人のことを助けようとするのかもしれない。
とまり　うん。
思恵　まあ、とまりは知ってるから。
とまり　うん。

間。

思恵　静かで良いところだね。
とまり　そんなことはないよ。
思恵　そうなの？
とまり　うん、毎日大騒ぎですよ、
思恵　そうなんだ。
とまり　うん。（間）最近、私は人と一緒に生活することに向いていないのかなと思い始めてきた。
思恵　そう。
とまり　うん。
思恵　自分の部屋はある？
とまり　あるよ。あるけど、人の出入りが多いかな。
思恵　なるほど。

間。

思恵　これからどうするの？
とまり　迷ってる。
思恵　（沈黙）
とまり　二つの道があって、一つは正しいけれど、目覚ましい結果が見込めない方法。もうひとつは、明らかに間違っているが、良くも悪くも大きな変化が見込める方法。間はない。
思恵　（沈黙）

とまり　あのぶつかりおじさんの顔を思い切り殴り飛ばした時、正直なことを言うと、とても気分が良かった。漠然とした悪意のようなものが、姿形をあらわして、こちらに向かってくる。そういうものに力を加えた時、かつてない達成感があった。危険だと思ったよ。快感は痛みと恐怖を麻痺させる。そして、これは手段としてこの世に存在する。

思恵　ああ。

とまり　ごめん、こんな話。

思恵　いいよ。

とまり　あれからずっと考えていて、揺れている。この振れ幅はわたしの心の満ち引きそのものだと思う。

思恵　そうなのかなと思ってた。

とまり　ありがとう。

思恵　ううん。（間）とまりが言ってた、正しいこと、間違ったことは、社会通念上の話？

とまり　そう。そうだけど、私の中の基準でも、同じ。

思恵　そう。

とまり　うん。

思恵　私の中にも波はある。

とまり　うん。

思恵　見えにくくしているだけ。

とまり　うん。

間。

思恵　あれから私も考えていて、結局言葉について考えている。

とまり　うん。

思恵　自分にとっては、生きていくために必要だったというのもあるけど、なんだろう。言葉は道のようなものかもしれない。言葉を失うと、道を失う。言葉を使って、過去を呼び戻すこともできる。

とまり　（間）力に対して鈍感になると、差別に対しても鈍感になる。いつの間にか力を持ってしまった私は、鈍感になってしまった。

思恵　今度のパレード、わたしも歩く。

とまり　そう。

思恵　うん。

とまり　ありがとう。

思恵　もっと、話をしよう。

とまり　（頷く）

依子が入ってくる。

布のかかったアンダーを見ながら

依子　まだ小さな子どもだったあなたを連れて、海を見に来たことがある。荒波で深く削られた岩場を見て、自分の心の中のようだと思っていた。それまで、大泣きしていたあなたは、波の音を聞いて、泣きやみ、眠り始めた。息の音が聞こえる。それが、私にとっては救いだった。

とまり　昔、乗っていた電車が大雪で止まったこと、覚えてる？

依子　覚えてるよ。

とまり　何時間も眠っていたような気がする。

依子　どのくらいだったかな。一時間くらいだった気がする。

とまり　そう。そのくらいなんだ。今だともうあっという間だね。

依子　そうね。

とまり　うん。

依子　永遠のような時間を生きていたと思ったら、あっという間に今ここに居る。

とまり　怖い。

依子　怖くないよ。時間は伸び縮みするから。

とまり　でも、早くなってしまった時間の流れは止まらない。今は一年があっという間だ。
依子　毎日が同じことの繰り返しになると、予想外のことに対応できなくなる。すぐにぶち切れるおじさんとかいるでしょ。
とまり　いる。
依子　変化を恐れて遠ざけると、人はそうなっていく。
とまり　避けなくてもそうなるでしょ。最適化されていく。
依子　そうね。

間。

依子　世の中は悪くなったと思う？
とまり　思う。
依子　私は良くなっていってると思う。
とまり　どうして？
依子　生きてきた時間の中で、そういう実感がある。
とまり　そう。
依子　うん。だから、きっと、これからも良くなっていくと、そう思っている。
とまり　楽観的にはなれない。私の中に、その連続性はないよ。
依子　そう。
とまり　うん。

依子は去る。

帽子をかぶった人が腰掛ける。

帽子　集団の先頭を行く人は、振り返ることができない。先陣を切るなら、尚更。後ろに仲間はいるのか。続いているのか、揉み合いになると、わからなくなる。そして、ぶつかる。ぶつかり、押される。押し返す。弾き飛ばされる。この一連の流れのどの瞬間を見るかで印象は変わる。集団は、前に進むしかなくなる。そばに木があればのぼって、上から見てみたい。平和というものを、静かな時間だと思い込んだ人は多い。静けさは沈黙、いつか破られる。静寂は中断、また続きが始まる。静けさがきたら、歩いて帰るのがいい。落とし物を見つけたら拾っておこう。届けるのは明日のほうがいい。

電車の中、とまりと思恵。

とまり　貸切状態だね。
思恵　（黙っている）
とまり　いきなり連れ出して、大丈夫だった？
思恵　大丈夫。
とまり　そう。
思恵　遠くへ行きたいと思っていたから、大丈夫。
とまり　そう。
思恵　うん。
とまり　もし、これから先も、しーちゃんを傷つける人がいたら、その人がどんな人間でも私は決して許さないと思う。
思恵　ありがとう。
とまり　（無言）

間。

思恵　あのさ。
とまり　うん。

思恵　もし、自分がそうなっちゃったら、どうする？
とまり　私？
思恵　（頷く）
とまり　なくはないのか。
思恵　とまりの、そう考えるところ、私、好きだよ。
とまり　（悩み苦しむ）
思恵　もし、私がそうなってしまったら。その間違いを正してほしい。
とまり　（わからない）
思恵　正当化しないでほしい。
とまり　そうか。努力してみる。
思恵　ありがとう。
とまり　うん。

間。

思恵　人生の最後の時間、静かに過ごすならどこに住みたい？
とまり　（考える）
思恵　海沿いか、湖畔か、山奥か、森の中か。
とまり　海かな。
思恵　私も海だな。

思恵ととまりはグータッチ。

とまり　一緒に住む？
思恵　いや、お隣さんくらいが理想。

とまり　ああ。
思恵　それで、互いの家を行き来する。
とまり　うん。
思恵　朝ごはんは一緒に食べて、外を散歩して、昼ごはんは別々。午後は元気な方がでかけて、もうひとりは昼寝。夕食は二人で食べて、そのまま一緒にテレビを見る。おやすみなさいと言って、家に帰る。
とまり　いいかも。
思恵　私はこれが理想かな。
とまり　いいね。
思恵　もし、ふたりとも、真っ白になって、それでも一人で生きていたら。
とまり　うん。そうしよう。
思恵　うん。
とまり　ちょっと近くで一人で暮らそう。
思恵　うん。

間。

思恵　なんか遠くまで行くの、久しぶりな気がする。
とまり　うん。
思恵　窓の外、どんどん景色が良くなる。
とまり　うん。
思恵　次の駅で降りてみない？
とまり　（寝ている）
思恵　（とまりの方を見る、しばらくして、また窓を見る）

引用　：『亡國に至るを知らざれば之れ即ち亡國の儀に付質問』田中正造

参考文献：『セックスする権利』アミア・スリニヴァサン

『革命伝説・宮本研の劇世界』日本近代演劇史研究会　編

『まとまらない言葉を生きる』荒井裕樹

『凛として灯る』荒井裕樹

『当事者は嘘をつく』小松原織香

『名人伝』『悟浄歎異』中島敦

『シンドラーのリスト』『ミュンヘン』スティーブン・スピルバーグ